

<金融史パネル>

第3報告：戦前日本の都市家計に対する小口信用資金の供給主体 —1930年代の東京市を中心に—

小島庸平（東京大学）

本報告は、主として1930年代を中心に、家計向けに小口の資金貸付を行っていたフォーマルないしインフォーマルな経済主体について検討することを課題とする。

戦前の日本を対象とする金融史研究においては、いわゆる「重層的金融構造」論に代表される構造論的アプローチや、個別の金融機関を取り上げた経営史的アプローチが主流となっておりⁱ、金融サービスの一方の需要者である個別家計を対象とする小口の資金需要のあり方については、預金・貸出双方におけるウエイトの小ささゆえに、ほとんど明らかにされてこなかった。本報告では、金融史研究における「家計アプローチ」とも呼ぶべき手法を採用し、こうした都市家計に対して零細・小口の資金を供給し（ようと）していた銀行や貸金業者の視点から分析を行う。

近年、開発経済学におけるマイクロファイナンスへの注目などを背景に、経済史の分野においても質屋や無尽講などといった小口金融に関する分析が活発化しつつある。だが、いわゆる「高利貸」と呼ばれてきた個人の貸金業者についての研究は、澁谷隆一氏の貴重な研究ⁱⁱがあるものの、都市部におけるその実態はほとんど明らかにされてこなかった。都市家計を対象とする資金の出し手は、従来の研究では人々に「吸着」する「寄生的」性格の強い経済主体として捉えられている。しかし、親戚・知人との日常的な関係性に基づく資金貸借においても時に高利を要求することがあり、対人信用に基づく有利子貸金の出し手の裾野は意外なほど底辺に近い部分にまで広がっていたⁱⁱⁱ。高いデフォルトのリスクを自ら背負って資金を貸し付けていたこれら貸金の供給主体たちは、いかにして資金を調達し、どのような金融技術に基づいて信用審査を行い、自らの債権の確実な保全と資金の蓄積を図っていたのであろうか。本報告では、都市家計における資金需要のあり方と、これに資金を供給する側の主体が有する金融取引のネットワークと金融技術の実態を明らかにする。

構成は次の通りである。まず1では、都市部に生活する俸給生活者や労働者が、中小商工業者たちと比べて相対的に大きな信用制約に直面していたことを指摘し、これらの人々に対して資金を貸し付ける際の審査の留意点や回収上の工夫などを同時代の文献から読み取ることで、当時の個人貸金営業者の持つ金融技術の実態を明らかにする。次に2では、金融恐慌後に預金を集中し、恐慌下でその放資先を模索する中で小口信用貸付に乗り出（そうと）した都市銀行の動きとその限界を、特に日本昼夜銀行に着目して検討する。最後に3では、『東京市商工名鑑』等を利用して、当時の貸金業者や質営業者を重層的金融構造の中へどう位置づけるのかを吟味し、銀行を中心とする制度的金融と個人金融業者との関係性について考察したい。